
最期の門番

真浦塚真也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最期の門番

【Nコード】

N7390X

【作者名】

真浦塚真也

【あらすじ】

最期の門前広場での、ちょっと長めのお話

やる価値はある。ただ、自信ははっきり言えば全くない。

そもそも、あの爺さんが言ったことは真実なのか。いや、こんな現実離れた状況で、真実かどうかなんて考えるほうが馬鹿げているのかもしれない。それに爺さんは、現に今ここにいないじゃないか。きっとあの爺さんは本当に成功したんだ。

どうせこのままここに滞在していたとしても、結果は見えていく。地獄行きだ。だったら、やるしかない、少しでも希望があるのなら。

「えー、では15番から35番の方々。列にお並び下さい。」
来た。ついに来てしまった。もうやるしかない。腹をくくれ。

俺は自分の意志を体现するように、頬をピシヤリと強く叩いた。まだ頬の感触を感じることはできる。痛みも感じることはできる。でも、あの門をくぐってしまえば…。

もうやるしかない。ここで躊躇してどうする。俺は…。

俺は、生き返りたいんだ。

「なあ、兄ちゃん。あんた、生き返りたくはないかい？」

途方にくれていた俺に、爺さんは突然話し掛けてきたのだった。

「えっ。いや…あの…その。」

俺は戸惑ってしまった。しかしその戸惑いは、爺さんが突然話し掛けたからではなく、ボロボロなTシャツ短パン、ビーチサンダルで、カップ酒を手に行っている爺さんの風貌に驚いたからでもなかった。

「ここがどこなのかって顔をしているねえ。」 爺さんは俺

の考えていたことをズバリ言い当てた。

「…ええまあ。」

俺が曖昧に頷くと、爺さんは可笑しくてたまらないといった満

面の笑みを浮かべた。前歯の欠けた黄ばんだ歯が見えた。

「でも、あんたも少しは分かっているんだろ。ここがどんな場所なのかは。」

爺さんはまた笑みを浮かべた。ああ、やつぱり。

「…はい。大体は。」

今度はさつきよりも多少自信を持って頷いてみせた。

「…あの世つてことですか。」

俺は胸の中で否定し続けた現実を質問してみた。

「まあ、みんなそう言うんだよねえ。」

爺さんは分かる分かつたかのようにうんうんと頷きながら、持っていたカップ酒を口に含んだ。「どうだ、一杯。」

「いや…遠慮します。」

俺は丁重にお断りをした。酒を飲める気分には到底なれない。というより、得体の知れない老人が口にしたものに出すことはどうしても躊躇われた。

「そうか。いい酒なんだけどな。」

そう言うつと、爺さんは残りの酒をグイッと口に含んだ。

「すいません。それより聞きたいことがあるんですが…。」

話を元に戻そうとすると、爺さんはまあ待てと言わんばかりに、手のひらを俺に見せつけた。それからゆっくりと頭を2回3回と回し、こちらまでゴクリと聞こえそうなほどに勢いをつけて飲み込んだ。骨と皮しかないような喉が酒を飲み込んだことを教えてくれる。

「おおおつふああー。いい酒だ。いやあー、酒は良いもんだ。」

兄ちゃん、あんたもこうやって酒を飲んでみたらいい。これが一番酒の回りがいいつてもんだ。」

そう言うつと、爺さんはニツと今日一番の笑顔を見せた。

なんなんだ、この爺さんは。兄ちゃんも飲んでみたらいいだろ？ 飲めるわけじゃないじゃないかこの状況で。というか、なんなんだこの状況は。爺さんもよく飲めるよなこの状況で。その前に、爺さんはなんで酒なんか持っているんだ。買ったのか？ 買えるわけないじ

やないか、この状況で。なんなんだ。本当になんなんだ。なんなんだ、この状況は。

「兄ちゃん。独り言が聞こえるほど気持ち悪いことはないぞ。」

爺さんがニヤニヤ笑いながらこちらを遠慮なしに覗き込む。

しまった、つい口に出してしまっていたのか。俺は慌てて口を結んだ。

「まあ、兄ちゃんの気持ちも分からなくは無いがね。そりゃ焦るさ。うん焦る、焦る。」

爺さんはそう言うのと、またカップ酒をぐびつと飲んだ。

まったく、ただの飲んだくれじゃないか。俺はあからさまなため息を吐いて、爺さんにぶつけるべきイライラをそつと地面にぶつける。

横目でチラッと爺さんに目をやる。爺さんは幸せそうに酒を飲んでた。爺さんになつてもこの飲みっぷりだ。若い時は相当の酒豪だったに違いない。

あれ？その時やつと俺は異変に気が付いた。

爺さんはさっきカップ酒を飲み干したはずだ。なのにまた飲んでいる。何故だ。そんなこと有り得るのか？

俺はハッと顔を上げて、爺さんを凝視する。爺さんは一緒キョトンとした顔をしたが、俺の問いたいことを理解したのか、ああと小さな声をあげた。

「兄ちゃんもやってみればいいんだ。欲しいです、と念じてみる。うーんとそうだなあ、よし、ウーロン茶だ。ほらウーロン茶が欲しいです、と念じてみる。」

何だこの爺さん、もう酔いが回ったのか。そう思い爺さんの戯言を苦笑いでいなそうと思ったが、爺さんがほらやってみると顎で促してくる。

仕方ない。俺はまたあからさまなため息を吐いて、爺さんの言うとおりに念じてみることにした。

ウーロン茶が欲しいです。

突然右手に重さを感じる。

驚いて目をやると、右手が液体の入ったコップを握っている。
飲んだわけではないが臭いは確かにウーロン茶だ。

「うわあっつ！」

思わず情けない声を出して、ウーロン茶の入ったコップを地面に放り投げてしまった。

パリーンとコップの割れる音が辺りに響いた。

周りにいた人々の目が一斉に集まる。怯えた目をしている人もいれば、何やつてるんだよと怒りの目を向けてくる人もいた。俺は誰に聞こえる訳でもない謝罪の言葉を口にして、小さく頭を下げた。

「あーあ、兄ちゃん何やつてるんだよ。タダだからつてものを粗末にしたらだめだぞお。」

爺さんはそう言いながら、また酒を口に含んだ。酒の減り方からして、また新しいカップ酒を手に入れたのだろう。

「な、何なんですかこの現象。」

「さあな。まあ、最後のサービスつてもんなんじゃねえーのか。まあ、俺にとつちや好きなだけ酒が飲めるから、嬉しいことこの上ないんだけどな。」

そう言いながら、また酒を飲む。左手ではちゃっかりとさきいかを握っている。

もう。なんなんだこの状況は。念じたら好きなものは手に入る？最後のサービス？なんだここは。地獄なのか、それとも天国なのか。いや、地獄というほど怖いことは起きてないし。でも天国というほど快適でもないし。ああ、もう。なんなんだ一体。

「だから兄ちゃん。独り言は聞こえない方が良くいんだって。」
しまった。また口に出してしまった。だがもういい。聞かれたっていい。ここが何処で俺はどういう状況なのか、それをただただ教えてもらいたい。

「お爺さん、ここは一体……。」

デケデク、デンデン！デケデク、デンデン！

俺の声を打ち消すかのように、突然大きな音が鳴る。

「兄ちゃん。」

爺さんが声をかけてきた。

「ここが何処なのか、奴らが教えてくれるよ。」

奴ら？俺は爺さんの発言に戸惑いながらも、恐る恐る音のする

ほうを振り返った。

1（後書き）

ご覧頂き有り難うございます。 評価・感想等頂けると嬉しいで
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7390x/>

最期の門番

2011年10月19日21時11分発行